

平成 23 年度 芸術鑑賞会 報告文

平成 23 年 11 月 28 日 世古 大和

今回、芸術鑑賞会では桂雀々さんとほか 4 名の方々が来られて、「落語」「南京玉すだれ」などを披露していただきました。自分自身も「落語」を聞くのは初めてだったので、印象に残ったことなどを紹介させていただき芸術鑑賞会の報告文とさせていただきます。

「落語」とは、江戸期から明治期ごろに原型が成立したと調べてみてわかりました。落語には、師弟関係のあるもので師匠の身の回りの世話をする弟子たちがいます。部屋の掃除など言ってみれば雑用をしていくのですが、師匠の身の回りのことをすることによって弟子は、いろいろなことを学んでいくのだと思います。現在、漫才のような二人で一つのネタをするものコントのように二人以上の人数でネタをするものではなく、落語は、コントのように一人一人に役が決められているのとは違い、一人で何役かを演じるというところにまず大きな違いがあります。一人で何役も演じるので落語の技術として、表情や目の視線と声というものが重要だそうです。目の視線を変えることによって、その場に二人いるように見せる。そして、声を一人一人で使い分けることでさらにイメージしやすくなる。また、落語は、一つ一つのネタにしっかりとストーリーがあるということも説明されました。落語は、常に、座った状態で行うというのがスタイルです。そのため、ネタをするのに小道具を使います。その小道具が、扇子と手ぬぐいのたった二つだけです。しかし、扇子が、箸、刀、筆といった長さの異なるものを表現します。実際に、扇子を使って表現しているのを見たのですが、箸や刀が見ているものにイメージできる表現力に驚きました。自分の中で落語といえば、うどんを食べるシーンが一番出てきます。これを、表現するときにも扇子、あとは、扇子を持っていない方の手でどんぶりをいかに持っているように表現するか、うどんを食べている音をどれだけうまく出せるのかで本当にうどんを食べているように見える。その音を出すのにもすごい努力や師匠などの見本を見て、自分なりにまた考え失敗を繰り返しながらこの技を習得していったのだと思いました。それは、落語だけでなく、私生活や社会に出たときスポーツなどいろいろな場面で、このようなことは必要なことだと思います。私も柔道をやっていて教えられるだけではなく、上手い人のものを見て真似ることや先生が自分以外の人に教えていることなどを横で聞きながら、自分でまず試して考えて失敗を繰り返しながら技というものが上達していきました。今回、今までなかなか触れる機会のない落語を聞き、生徒も初めての子がほとんどだったと思います。でも、何も考えずに見るのではなく、落語家の人たちがどのような努力をしてあの舞台にたてるようになったのかを考えてみるとまた違う見方もできるのではないかと私は思いました。

私は、人をひきつける話し方や表現力といったところを喋りが仕事の落語なので、話しのもっていきかた間に冗談などを交えながら聞いている人に飽きさせない工夫というものが、これから教師をしていくなかで役立てていけることだと感じながら見せてもらいました。これで芸術鑑賞会の報告を終わります。

